

竹富島の鍛冶伝承

上勢頭, 亨 / ウエセド, トオル

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

103

(発行年 / Year)

1982-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015580>

竹富島の鍛冶伝承

- 一、はじめに
- 二、根原金殿のこと
- 三、鍛冶の願い、輔まつりのこと
- 四、鍛冶工狂言について
- 五、鍛冶遺跡について
- 六、西塘について
- 七、鍛冶についての伝承
- 八、おわりに

上勢頭 亨

一、はじめに

鉄を産しない琉球諸島においては長く石器時代が続き、鉄器が流布したのは比較的遅い時代だったといわれる。武器、農具、造船、築城にしろ鉄の流入による文化衝撃は計り知れないものがあつたとだろう。それゆえに権力を握ろうとする者は鉄器の入手に敏感で、英祖王、察度王、尚巴志、尚円と各王統を起こした人物は何らかの形で鉄、鍛冶と関連した説話をもち、また外国船の出入りする貿易港の近くに発生している。考古学者、多和田真淳氏の報告では、沖縄で最も古い鉄器遺跡は中城村

渡口で十世紀頃と推定されている。

八重山における鉄器受容は、八重山考古編年第三期、十二、三世紀頃とされているがここ竹富島にも平家の落人、倭寇の伝説がある。鉄武器による征圧という血なまぐさいものではなく、鍛冶師はカイジ御嶽に神として祀られ遺跡が現存し、鍛冶、鑪に対するまつりがあり、農耕の予祝たる種子取祭もまたその発生からして鍛冶との関わりをもっている。だが昭和四十年三月、竹富島で最後の鍛冶師の転出により鑪まつりも自然消滅の形となり、近隣での主島石垣島においても祖国復帰前後から技術革新により、鑪もバーナーにとってかわられた。

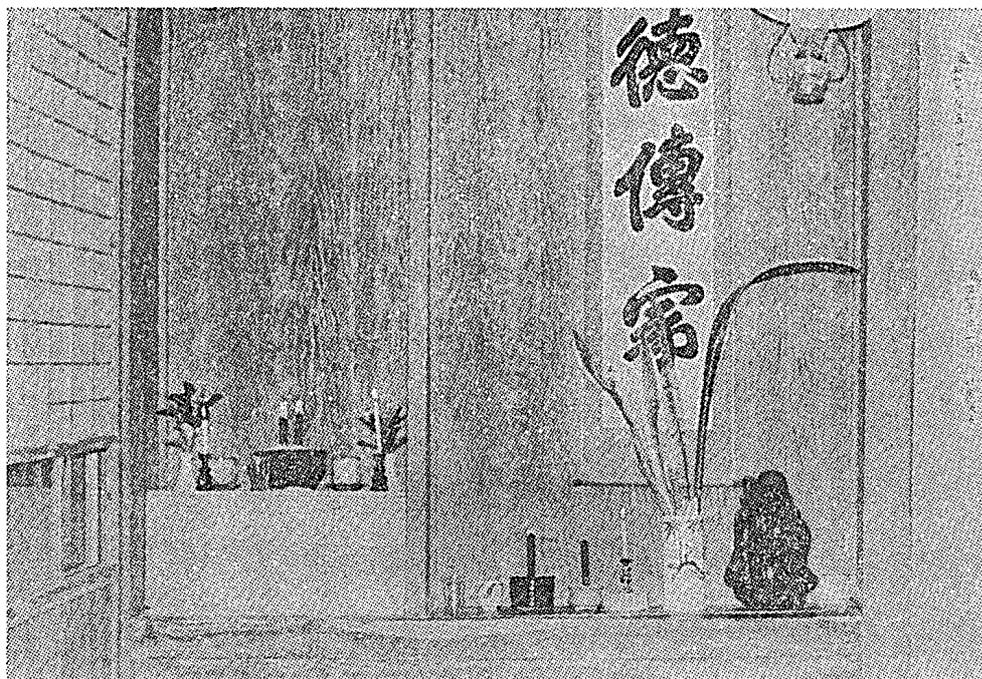
然るに昭和五十四年、竹富島の神女大司である石川明が神意を得、その年の旧暦十一月七日に鍛冶願いが復活し、五十六年には鑪のまつりも再現された。まさに消え去ろうとする寸前だったこれらの祭事を再興した当事者として、筆者がこれまで聞き、伝えられてきたことを書き連ね、竹富島における鍛冶について考察してみたい。もとより史実と伝説とは厳密に区別して取り扱わねばならないことであろうが、当竹富島には口碑、伝説は数多あっても文献らしきものがほとんど無いので、逆にどうしてそのような伝説が生まれたのかについて、今後学問的取り組みがなされていけば幸いです。

二、根原金殿のこと

竹富島には六山ムイヤマと呼ばれる御嶽ミタケがあり、その子御嶽コミタケや村御嶽ムラミタケを加えると二十八ヶ所を数えることが

できる。六山とはそれぞれ、かってこの島に渡来して村建てした集団の祖神を祀る御嶽で、島民はどれかの御嶽の氏子である。これらの中でも波座間御嶽の祖神、根原金殿ネイレカンドスは最大の勢力者だったときれ、伝説も多い。一例を挙げると、昔、大和の国から根原金殿という武士が竹富島に渡ってきた。その武士は小さい頃から鉄の粉をまるで麦粉のように食べて成長し、青年頃に鉄で作った擢を使って遠い海を渡ってきた。徳の高い人で農業を広め、人民を可愛がったが、与那国島まで領地にしたと考えていた。それで与那国の島仲村の女を愛人にして、島の様子を探っていた。しかし、いつしかそのことが島人に知られ、女は村人から金殿を殺すようにと頼まれた。いつものように闇夜を忍んで金殿がやってきて女の隣りに休んだが、全身鉄のようで柔らかい部分がなかった。ようやく一ヶ所だけ首の中心に柔らかい部分を見つけて金殿の眠っているすきに力いっぱい短刀を突き刺した。金殿は驚いて家をとびだし、鉄の棒を杖にして部落の中央まで足音を踏み鳴らして走った。あまりの物すごさに、さては仕損じたかと部落の人たちは早まってけがをしたり死んだりした者も多かった。金殿は立っただまま往生し、七日目に大きな音をたてて倒れたという。これは昭和十年頃、祖父の上勢頭保久利より伝承したものである。

この伝説は、近江国伊吹の弥三郎伝説にも通じるところがあり、一、鉄を食べる。二、全身鉄張りであるが、ただ一カ所だけ柔らかい部分がある。三、武名を轟かせる、四、愛人に弱点を知られる等、鉄人伝説の要素を満たしている。



根原家の床の間

また隣郡宮古島には、鍛冶の神は日本島の黒鉄を積みあげた中に生まれ、鞆や鍛冶道具を積みこんで沖繩島に渡来し鍛冶技術を教えた。さらにその後、宮古島、多良間島を経て八重山に渡り、最後には与那国島まで行った。与那国ではずい分兇暴で恐れられ、彼の妻はその睡眠中、頸部にわずか一寸角ほどの肉身をさぐりあてて七首でようやく殺害した。それで鍛冶神は与那国島より西へは行かなかったという伝承がある。これは名前こそ出てこないが竹富島に伝わる根原金殿とみることができ、根原金殿の子孫である根原家には系図はないものの、波座間御嶽の殿居元(刀祢元)として、床の間には金殿の御神霊を祀った香炉が安置されている。また家の西隣の道路に面して拝所があるが、これは金殿が船具の擢を納め、与那国へ出かける前に航

海安全を祈った所とされている。庭には、一夜のうちに与那国島から漕ぎ戻って手足を洗い清めたという池がある。さらに竹富島の西方に「ナナヨウ」と称する海があるが、これは金殿が七回擢をこいでこぎつき、ここで一休みして与那国島へ向ったとされている海である。

竹富島には種子取祭という祭事がある。例年十、十一月頃のツチノエネの日を中心に十日間、神事を行った行われる。豊年予祝の祭事で種子おろし祈願や、クライマックスの奉納芸能は二日間、神事はさんで三十六時間ぶっ通しに続けられ、人口三百人そここの島が多勢の帰島者であふれ熱狂する。この祭事に伝わる口碑によると、昔、竹富島には六つの村があり、六人の酋長が作物の作り方などを指導していたが、その種子蒔きと祈願の日取りはまちまちであった。波座間村と仲筋村は「ツチノエネ」の日に種子取祭を行っていた。波座間村の酋長である根原金殿は、六つの村が三つに分れて、それぞれ種子取祭を行うのは民財の消費も大きいので、一つになって心を合わせて行うのが島の将来のためになると思い、小波本村の酋長フシソウに自分の妹を嫁がせて説得させた。そして後に東方の三カ村もこれに同調するようになった。これは六名の酋長の勢力争いを彷彿させるもので、そのさまは神司が神前において祈願する「願口」や、一日目の奉納芸能終了後から徹夜で行われる「ユークイ」の巻きうたにも如実に現れている。

種子取願

(意識)

根原金殿又仕立始

ミオータル

チチヌ子ヌ種子

根原金殿が始められた「つちのえね」の日の種子

取トル又ニガ願イ 種タ子ニ下ウルシ又ニガ願イ 大ウツ畑ハテ抵トウ畑ハテ又ムシクイ物イ作クイ又ニガ願イ
イ 作スルドスウ作スルビー又ニガ願イ 後ンッテイ打ウチ 前マ
ッテイ蒔マク 蒔マク種タ種ニヤ 五イチ日カ越グシ 十トウ日カ越グシ又ニガ夜ユ
雨アメンナ——以下略

ユークイ卷うた

一、アガトカラクガナ誰タガ故ニドウ来キ待マル 此ク又ド殿ウン
内チ主シ前ユ又 故ニドウ来キ待マル ヨンナ 此ク又ド殿ウン内チ主シ
前メ又

二、此ク又ド殿ウン内チ主シ前ユヤ 果カ報フ又マ生マリヤリド 米ク倉ミユ
腰ク当サ 産ナ子シ前アナシ ヨンナ
米ク倉ミユ 腰ク当サ

三、ウヤユミサアテインウ恥ハジカサアテイン 遊アス
ビ好スキヤリド ウ許ニシ給タリ ヨンナ
ウ許ニシ給タリ

四、遊アスババン遊アスビ 踊フラバン踊フリ 足ア元シユミシク

取の願いは種子蒔きの祈願である。大きい畑、肥えた畑で吉日を選び後へ前へと蒔かれた種子が、五日越し、十日越しの雨で——

あんなに遠くからやって来たのは誰のためでもない、この殿内の御主前のためにです。

この殿内の御主前は果報の人なので、米倉を背に子孫らに囲まれていらっしゃる。

恐れ多く恥かしいのですが、遊び好きなのでどうぞお許してください。

遊ぶなら遊び、踊るなら踊りなさい。足元に注意

思ウムイトウミリ ヨンナ

足アシ元ムトウ ユミシク

五、此コ又マタ夜ユアンガマ又マタ踊ウル足アシ見ミリバ 美御前立ミヨウマイダツ

馬ウマ又マタ足アシ又マタ如ドニ ヨンナ

美御前立ミヨウマイダツ馬ウマ又マタ

六、此コ又マタ殿内大庭ドウシチウラミヤヤ 大オホ置オキ又マタ上ウヘヤ 大オホ置オキ又マタ上ウヘヤ

大オホ置オキ又マタ上ウヘヤ 大オホ置オキ又マタ上ウヘヤ

七、陽春ウラルジンアラヌ 若夏ワカナチ又マタアラヌ 此コ又マタ夜ユアンガマ

ヤ 煎米イルグミ含フクミ ヨンナ

此コ又マタ夜ユアンガマヤ

八、現アラワリリクガナ パシクリリンゾヨ 此コマカ

又マタシヤアテイドウ 此コマニ来待キヤヒル ヨンナ

此コマカ又マタシヤアテイドウ

九、此コ又マタ夜ユアンガマ又マタ夏粟ナチアイグルタラシ 吾身ワシヤ豆マミ

ナヌテイ ウシ卷マキアスバ ヨンナ

吾身ワシヤ豆マミナヌテイ

しながら。

今夜のほほかむりをした男たちの踊る足並みを見ると、王様の前に立つ馬のようだ。

この殿内の庭は大守の庭のようで、大置広筵の上は心ゆくまで踊れる。

陽春、若夏の節でもないのに今夜のアンガマは麦こがしを含んでいるようだ。

顔を見せなさい男たちよ。ここがいい所だと思つて来たのでしょうから。

今夜のアンガマたちは夏粟の桿のように首を垂れている。私は豆蔓になって巻きとってしまおうか。

この巻うたの最後は、根原金殿の前に現われた他の酋長たちを粟にたとえ、自分は豆かづらになつてみんなを巻きとつてしまおうと勢力争いの様子がよく表われている。六山の祖神(酋長)には他にも、初金殿、他金殿と鍛冶に関連する名前があるが、鉄に関連した人が勢力を拡げていく過程がうかがわれる。

また、根原金殿を祀る波座間御嶽の願い口をみると、

- | | | | | | | | | |
|----|--|---|---|--|---|---|-------------------------|------|
| 一、 | 拜 <small>ウカ</small> 始 <small>ヘシ</small> ミ | 為立 <small>シタ</small> テ始 <small>ヘシ</small> ミ | オ一 <small>ヒ</small> タル | 大ヤ <small>ウウ</small> ン主 <small>シユ</small> ヤ | 拜 <small>ウカ</small> み始 <small>ヘシ</small> め、 | 為立 <small>シタ</small> テ始 <small>ヘシ</small> められた | 大親主親 | |
| 二、 | 豊見 <small>トユミ</small> オレン | 神山 <small>カシヤマ</small> | 降 <small>ウツ</small> リミソール | 大ヤ <small>ウウ</small> ン主 <small>シユ</small> ヤ | 豊見 <small>トユミ</small> オレン | 神山 <small>カシヤマ</small> に降 <small>ウツ</small> りられた | 大親主親 | |
| 三、 | ハタト | 大主 <small>ウラフルジ</small> | 降 <small>ウツ</small> リミソール | 大ヤ <small>ウウ</small> ン主 <small>シユ</small> ヤ | ハタト | 大主 <small>ウラフルジ</small> (神名)が降 <small>ウツ</small> りられた | 大親主親 | |
| 四、 | 屋久島 <small>ヤクジマ</small> ハラ | 渡 <small>ワタ</small> リ | 拜 <small>ウカ</small> ミ | オ一 <small>ヒ</small> タル | 大ヤ <small>ウウ</small> ン主 <small>シユ</small> ヤ | 屋久島 <small>ヤクジマ</small> から渡 <small>ワタ</small> 来 <small>キ</small> して | 拜 <small>ウカ</small> まれた | 大親主親 |
| 五、 | 根原 <small>ニバラカンド</small> 金殿 <small>ド</small> ヌ | 降 <small>ウツ</small> リミソール | 大ヤ <small>ウウ</small> ン主 <small>シユ</small> ヤ | 根原 <small>ニバラカンド</small> 金殿 <small>ド</small> が降 <small>ウツ</small> りられた | 大親主親 | | | |

——以下略——

となっているが、豊見とは宮古地方で勢力者に対する尊称として使われているし、屋久島から渡ってきたことも表わされている。このことから竹富島に勢力を張った根原金殿は北方から島伝いに南下

してきた渡来人と推察することができる。

ところで、与那国で果てたとされる根原金殿は、その後昭和十六年旧暦七月六日夜、与那国島、島仲村の墓所より香炉灰をご神霊としておともし、波座間御嶽に安置された。これは竹富島で前年頃から島中にイモ虫が大発生し、また松並木も全滅したことから、部落会でユタ(巫女)の判断を聞いて、大司以下四名が与那国に派遣された。ところが与那国島民は固く口を閉ざして墓所も教えなかったので、十日間も滞在してやっと探しあてたという。

三、鍛冶の願い、鑪まつりのこと

竹富島の南西方、カイジ原は八重山統治の蔵元があった場所だが、ここには今も鍛冶神を祀ったカイジ御嶽がある。農耕に必要な鉄製の鎌、鉾、鍬等の作製修理は全部、鍛冶師に頼らなければならなかった。あの過酷な人頭税時代にも、村鍛冶、村大工、村紙屋、村念仏師、村司の五職は免税とされた。そして毎年旧暦十一月七日には、村鍛冶師の家で鑪まつりが行われてきた。この行事は村行事として二日間盛大に行われ、六名の神司、部落有志他多数が出席した。その費用も、農業をしている者から一人につきいくらと、鍛冶御酒代カジグンダイが割当てられていた。昭和三十五年に行われた時の様子を記すと、鍛冶場から鑪を鍛冶工主の家に移すが、軒下には注連縄が張り廻してある。鑪の前には香炉と清めの塩がそなえられ、そして四段の重箱に花米が盛られている。さらに御酒、茶、水、生花、モ

チ、灯明、大皿の供物それぞれ一對を飾り、鞆の上には羽根をむしりとったニワトリを、ススキの茎二本を使って立たせる。そして夜中願いと称して夜中に、鍛冶師を中に六名の神司が囲みさらにその周りを姉妹神が囲み、願い口を唱え、三十三拝の礼拝を行う。当日、前大底多那翁から伝承された願い口を記す。

夜中願い又願い口

トウトウ
ウ尊

一、霜月 師走 長月又七日夜 子丑又時ニ生リ

オ一タル 大鍛冶長鍛冶又神又前

二、上大和唐大和 炭岳炭頂ハラ 大窯小窯姉妹

神又前

三、鍛冶工主又 手勝ル 腕グサイ 手ングサイ

又願い

四、竹富元又島イ 渡リオーリ 生甲斐 産甲斐

ニ 尊敬オール鞆又神又前

五、島又タミ 村又タミ 見守リ嘉例オール 大

鍛冶長鍛冶又神又前

十一月七日の真夜中に生まれられた鍛冶の神様

大和の国から道具を、山からは炭をもってきて火を起す姉妹神

鍛冶工主のりっぱな腕まえ、手ごしらえの願い

竹富島に渡ってきて生まれ甲斐があったと尊敬さ

れている鞆の神様

島人のためにいいことがあるよう守ってください

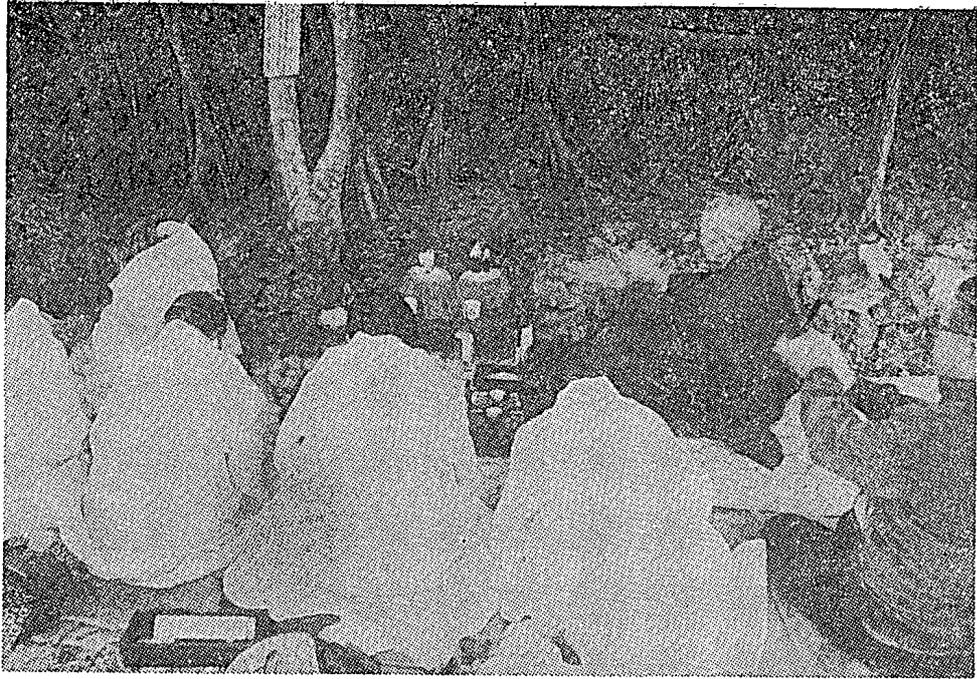
鍛冶の神様

- 六、大躰ウウフケクウフケ又上ウイ 大鳥羽ウウドウイバニドウイ鳥ヤ 鍛冶工主カジグシユ又身ミ
- 代ガワり 體ドウガワ代リリヌ 神供物カンクムチウ調トトナイ
- 七、大御酒ウウグシ 大花米ウウハナグミウ飾カザり クバンカンミンヤク神饌酒ウ調トトナイ
- 千尋立シンビルタ生花イキバナスラシ
- 八、洗花アライハナミガキハナ磨花イル 色カシヤトウイチ又神茶湯カザ一対トウミウ飾カザり ウ灯明トウミ
- 一対イチ又花ハナスラシ 鏡台カガンダイウ茶粉台チヤスグダイ一対イチウ飾カザり
- 九、一番イチバンニ二番ニバン又スズル硯蓋フタ又ク九品盛ク又フチ九ク又クロヤ 苦口辛ンガフチカラ
- 口悪魔フチアクマ口死風フチンカザ又フチグトウ口事ハラ又ハラ祓ハラキ又ハラ供物ムチ
- 十、ドウドウデデインインナ 鍛冶工主カジグシユヤ 石イシ又イシ硬コウサ金カニ又カニ硬コウ
- サ 體強ドウシユウ身強ミンシユウサアサラシタボ給タボリ 命果報スチガフヤ百二十ヒヤクハタチ
- 年トウシナカラアタボラシ 給タボリ ウ尊トウツト

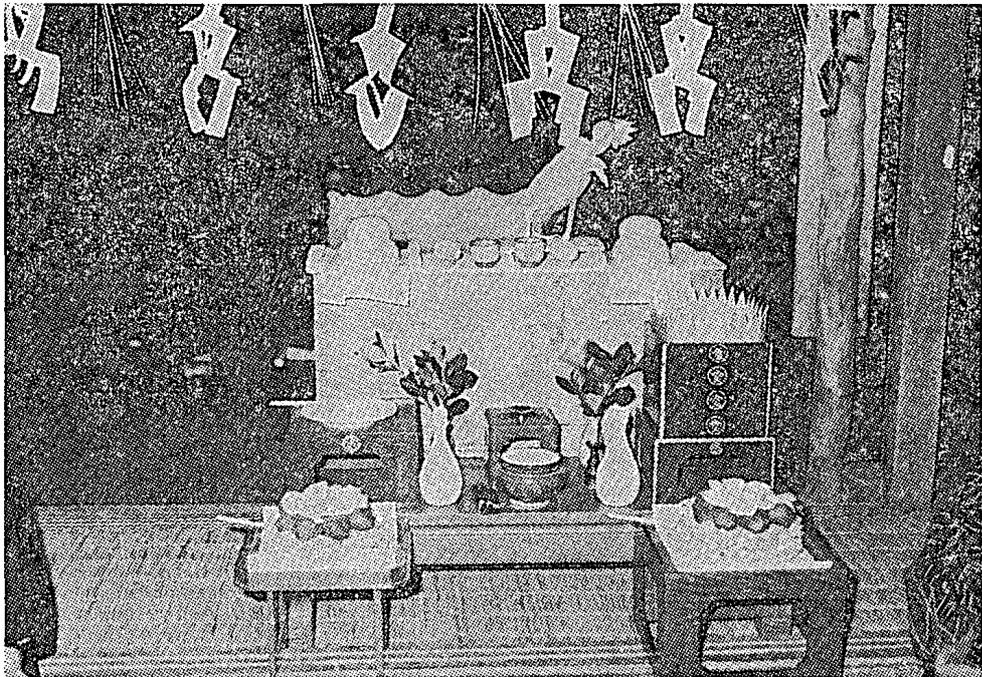
以上の願い口を唱えて真夜中のまつりをする。

その翌朝五時頃には朝願いを行うが、鍛冶工主の姉妹神、叔母神たちは持参したお米一合を躰の前
の大花米に添え、また持参のお香をたいて鍛冶工主の健康を祈念する。その後鍛冶工主は躰の前に供
えられた神酒を姉妹神にさしあげる。その時、姉妹神から祝盃の言葉が述べられるが、それを姉妹神
の盃盛り（フナルンガンヌサカムイ）という。

躰の上には鍛冶工主の身代りに大鳥を供え
酒、米を供え クバン、かもし酒を作り、イッソ
ウの枝も生けて
洗米、お茶一対、灯明一対を並べ、飾餅一対を供
え
二つの大皿には九品の料理を盛る。この九品の意
味はさまざまの悪い事の祓い清めの供物です。
どうぞ鍛冶工主が石のように 金のように頑健で
ありますように。百二十歳以上までも長生きさせ
てください。



鍛冶御嶽の願い



輔まつり

サカムイの言葉

サテイム サテイサテイ ヒサレヒサレ 今日又御座敷ヤ鍛冶工主又手勝ル又御願イ 叔母神姉妹
神島又神女頭又御守リオートル御陰ニ今年歳ヤ吉イ鍛冶生ラシ 事々数又思事叶シミ 今日又銀
日 黄金日ナリ 神又礼上又礼ヤヌクル番タマル番有ラシ給ラングトニ 解リ上ギシミ給リテイ
リ 今日ハラ先 明日ハラ前ヤ 祝グト祝儀グト招カシ給リテイリ又吉事ヌ 台又盃又御酒ヤ 初ミ
テ姉妹神ハラ給ラリルンユー ヒサレ

以上酒盛の言葉を挨拶した後、参列した全員に神酒が廻り、躰の上に供えたニワトリの吸物や、硯蓋の九品の料理、鏡餅などを下げていただく。その頃には三味線、太鼓を鳴らして鍛冶工主を祝福する御前風節を唱う。その御前風節を「カジグヌグジンプ」という。

鍛冶工ヌ御前風

今日又御祝ヤ タダナラン御祝

鍛冶工主ヌ前ヌ 手勝ル御祝

ハーリ 鍛冶工主ヌ前ヌ

鍛冶工主ヌ 手勝ル御祝 ヨンナ

この祝盃の式典が終ると、島内の役職者、鍛冶工主の友人、知人その他七回に分けて客を招き、一日中お祝をした。

このまつりも昭和三十九年をもって途絶えていたが、五十四年には鍛冶御嶽の願いが、さらに五十六年には不完全ながらも鞆まつりが復活された。

鞆まつりでことさら異様に思われるのは、鞆の上に羽根をむしりとったニワトリを、ススキの茎で四ツ足のように立たせることである。これについては昭和六年頃、前我名釜多翁から伝承した話を記す。

鍛冶ヌ物語（カゾヌムニガタイ）

昔、むかし、人間がまだ木の実を食べて生活していた頃は體中に毛が生え、猿のように尾もあったそうです。その後、大和や唐の国から鉄で作られた道具が入ってきて、その道具で農業を始め、米、粟、麦、イモ、キビ等を作り、また斧、刀、槍、弓矢等で獸類を殺して食べるようになってから、體の毛も尾も抜けてしまったそうです。それは鍛冶工主のお陰であると感謝したそうです。しかし獸たちは、自分たちの仲間を殺して人間が食べている事は許してはおけない。一日も早く鍛冶工主の首を打ちとってしまわなければならない、と天の大明加那思ウラミヨガナシに願うことになりました。大明加那思は獸たちの大将を呼んで、鍛冶工主を討つのは旧曆十一月七日の真夜中に急襲するように、と教ええました。獸の大将は数十万の仲間を引きつれて、その日の来るのを待っていました。

大明加那思はまた、鞆の神をお呼びになりました。そして獸たちが鍛冶工主を狙っていることを知らせました。鞆の神は驚いて、どうしたら良いかを尋ねますと、大明加那思は鍛冶工主が大事に飼っ

ているニワトリの羽根を抜いて立たせ、鍛冶工主の身代りとし、鍛冶工主を姉妹神、多数の親戚で七巡り巻いてその夜は眠らずに守りなさい、と教えました。鑪の神は人々の幸福のためには鍛冶工主を殺させてはならないと責任を感じ、十一月七日の夜は自分の上に大鳥を乗せて待っていました。いよいよ恐しい音をたてて、数十万の動物の霊が襲来しましたが、鑪の神の説得と鍛冶工主の三十三拜の願いで、悪魔たちは身代りの大鳥を引きとって退散しました。このように鑪の神のお陰で鍛冶工主は長命し、人々の役にたったので、鉄器を使う人たちは盛大に厳肅に鑪まつりを行っているとのことです。

四、鍛冶工狂言について

竹富島最大の祭事である種子取祭は農耕の神、火の神への儀礼、奉納である。二日間にわたって奉納される芸能は七十点余を数えるが、毎年必ず演じなければならない『例の狂言』と呼ばれるものがある。「長者」、「弥勒」は世襲の家系によって演じられるもので、狂言というよりも儀礼に近い。狂言の最初に演じられるものが鍛冶工主であり、続いて組頭(畑の耕作)、世持(種子蒔き)、世曳き(収穫の初穂あげ)と農作業の順を追っていく。その間や後に数々の踊りや劇がとり行われる。鍛冶は農業の元になるので一番に演じられるのである。

鍛冶工狂言

鍛冶工

鍛冶工^{カザグ}ユ一 役人^{ヤクニン}主^{シヌウ}又^{マタ}朝晩^{アサバン}説^{トウツ}キタミシオツソウ
 今年^{コトウシ}上納^{シヨウノウ}テイヤ 叶^{カナ}イ叶^{カナ}イトウウシヤンギボ
 ーリヤ 此^ク又^{マタ}来^キ年^{ネン} 上納^{シヨウノウ}又^{マタ}作法^{サクホウ}又^{マタ}儀^ギドウユウ
 手^テ広^{ヒル}クニ 仕上^{シイア}ギウンヌキリヨウテイ 説^{トウツ}キタ
 ミシオーリバドウ吾^{マイヤ}家^カナ 座^ゼテイリ クウクウ
 トウ考^{カンガ}イミリヤ 作^{サク}法^{ホウ} 仕上^{シイア}ギリテイヌヤツタ
 ー使^{スカ}イ刃^バ肝^{カン}要^{ヨウ} 道^{ドウ}具^ク肝^{カン}要^{ヨウ}テイ 思^{ウム}ウリリバド
 ウ今日^{キノウ}ヤ 鍛冶^{カジ}シ日^ヒ撰^{セン}ン イイ日^ヒ撰^{セン}ル 鍛冶^{カジ}屋^{ヤン}行^{コウ}
 ジ風^{カシマ}生^{シマ}ラシ 鉾^{ヒラ}新^{カナ}調^{バイ}イシ村^{ムラ}ヌ子^コ 老^{ウイ}人^{ヒト}
 札^{フダ}人^{ニン} 三^{サン}分^{ブン} 地^ジ ハジリマデイ 手^テ不^フ足^{ソク}ネンヨ
 ーン ウチ渡^{ワタ}シテイリ
 トウテイ出^デジ ハカナライ スツタラ サラサ
 ラテイ ナチヨウスムルテイ 思^{ウム}ウリリバドウ
 今日^{キノウ}ヤ 鍛冶^{カジ}屋^{ヤン}行^{コウ}ジ 風^{カシマ}生^{シマ}ラシ 給^{タボ}ラリルンテイド
 ウ アローユ 前^{マイウチ}打^{ウチ}ヌ達^ベン 含^{フク}ミドウウケルユ

鍛冶工でございます。役人様が朝夕教えてくだ
 されたので、今年の上納も無事にすまされ役人様
 も喜んでおられます。来年の上納の作法について
 は、手広くやるようにといわれましたので、私は
 家で座ってよくよく考えてみましたが、もっと収
 穫をあげるとしたらまず鉾、鍛などの道具が大事
 だと思いました。

そこで今日は鍛冶をするには日もいいし、鍛冶小
 屋へ行って風を起こし、鉾、鍛を作り村中の全員
 に不足なく行きわたるようにしておこうと思いま
 す。

そしたらいざとなつて、いっせいに畑仕事をやっ
 ても順調にはかどると思われるので、今日は鍛冶
 小屋へ行って風を起こさせていたかどうかと思つて
 います。前打たちにも言い含めてあります。前打

前打ヌ達

前打ち一、二 輔いいじや

オー

クヤナラ イイジヤ

鍛冶工主

ンー 鍛冶屋イ 鍛冶屋イテイ 言タルヌン今
日 トウ供シレー

輔いいじや

今日ヤ 風ン南下リキサーリテイ 鍛冶シ日撰
ン イイ日撰テイ 思イカシ イイジャンスダリ
供スナラ

(全員舞台を一巡して鍛冶小屋へ行く)

鍛冶工

トウ 此処ヤ サラサラーテイ 道具出ザシ飾
レ 窯祭り 御酒取り来ウ

前打ちその一

達よ。

はい

今日は、叔父さん

うん、前から鍛冶小屋へ行こうとっておいたのは今日のことだ。さあ行くぞ

今日は風も南風になって鍛冶仕事にはいい日だと思っていました。おっしゃるとおりにお供します。

さあ着いたぞ。さっさと道具を出して並べろ。窯祭りのお酒をもってこい。

オイスナーラ イイジャ

鍛冶工

鍛冶屋カシヤ又飾カザインログチヌ 有アリドゥリバ 飾カザラバ ユ
ウ聴ウキ ヌンクミ 来エン年ンハラ先サチエ バンカシャカ飾カル
ングトウドゥ 前アイウチ打ちベぬ達

(鍛冶工は神酒を供え祝詞を唱える)

ウ尊トウト 今日キユウ又ヒ日 黄クガニヒ金日 月ヒキナラ月調ヒキビ 日ヒスチ
ナラ日選ヒスチイラビ 今日キユウ又ヒチチヌニ種タニドール子取ヌヌ
イイ日和ビニールナラ 大風ウウカシナカシマ長風マ生マラサバ 大ウウフケクウフケ鞆ウウハサン小鞆
大ウシガマクシガマ鞆ウウハサン小鞆 ウンガナクンガナ 大ウウシチクウシチ鞆ウウハサン小鞆
小クウハサン鉄 フクミフクタン ソウチホウチヌ 引ヒキ
ン金掛ガニカキン金ガニ又カシ神カシ又カシ前マイドウ 神遣カシヤライ上遣ウイヤライン 給タホ
リテイリ 鍛冶工カザダ又カザダ叔母オバマ神カシ姉アハ妹イモ神カシナ 鍛冶工カザダ又
腕ウデグサイ 手テグサイ又ニガ願ニガイドウ 大フウカニナカニ鐵長鐵 ム
ツツカバ赤土アカンダデ餅土ムチンダデ 合目マイメネスナ寸節スンプシネスナ
餠餅アンムチ又ヒダ肌ヒダフルンケタホーリ 給タホラリテイリ

はいどうぞ叔父さん

鍛冶屋の窯まつりの祝詞があるぞ。今から唱えるのでよく聞き、呑みこんで来年からはお前たちでやれよ。

ああ尊し。今日という日は月日を選んで最高の日です。今日の「つちのえね」の種子取のいい日に風を起こして、鞆、窯、鞆、大鞆小鞆、大鉄小鉄、木炭、ほうき、火かき棒など道具の神様を呼び、集まっていただいて鍛冶工の叔母神姉妹神は鍛冶工のりっぱな腕ごしらえを願い、大鉄長鐵を使って赤土をこねたようになめらかで、継ぎ目なく餠餅の肌のようにふっくらとさせてください。

打チヌベ一引キ引キ 引キヌベ一打チ打チ 昼
間申時マサントウキシナ 百二十刃打チナミ スルンギスル
ンギ給タボラリテイリ 遠サンナ聴クラ 近サンナ
見ユラテイ ジャンナジャンナシオール 願ニガイ
ヌ御酒ミイグシドウ 初ハゼテ吾トウラリッテイ 後アトウラ バ
シヨンオイス 前マイウチ打チヌ達ベ

(祝詞「ウディングサイ」の時、前打ち一は「ウディ
ングサイテ アンジョールンド」という。また「アン
ムチ」の時、前打ち二は「アンムチテ アンジョール
ンド バヤ クワツチヌ事ド」と両手で摺んで食べる
動作)

鍛冶工

トウサラサラ グシマワセ 着物シハジリ ガシ
ヨウネヌ元ムトウイ引ヒキ下サイレ

(全員身じたくする)

サラサーシ火起ヒクシ

備ヒいいじや

打ち延べては引き引きして、申の刻までには百二
十丁も作りあげられるようにと、遠くでは聴き、
近くでは眺めて喜んでおられる。その願いの神酒
を初めは自分がいただき、その後からお前たちに
廻してあげよう。

さあ 着物を脱いでがじゅまるの根元にかたづけ
ろ。

さっさと火を起こせ

ヒーヤーヘー

ヒーヤーヘー

ヒーヤーヘー

(と掛け声をかけて鞆をおす)

鍛冶工

トゥイトウイトウイ

(鞆いいじやの次の歌にあわせて三人は槌をうつ)

鞆いいじや

大和^{ヤマト}又^{マタ}島^{シマ}カラ渡^{ワタ}サバエ 山城^{ヤシロ}又^{マタ}国^{クニ}カラ移^{ウツ}サバエ

八重山^{ヤイマ}竹富^{タケトウ}ニ買^カイ込^クミテ

鍛冶工

トゥイトウイトウイ

(打って仕上げる)

トゥ 今^{イマ} 鉦^{シラ}

鞆いいじや

ヒーヤーヘー

ようし、よし、よし

大和の島から渡ってきたら。山城の国から移してきたら。八重山竹富島に買ってきたら。

ようし、これまで

さあ 今度は鉦だぞ

ヒーヤーヘー
ヒーヤーヘー

鍛冶工

トゥイトゥイトゥイ

(再び次の歌に合わせて鉄を打つ)

鞆いいじや

浜^{ハマ}又^マ真^マ砂^サヤ米^クテンド 河原^{カワラ}又^マ砂^サ子^シヤ鐵^テテンド
船^{フネ}タテ 便^{ビシ}タテ行^イキムナエ

鍛冶工

トゥイトゥイトゥイ 此^コ処^マヤ盛^ムレリドリヤユン

ナユンナダッテニ

(前打ち一、思いきり打つ)

アガヤ トウテ 盛^ムレラシ

(といて一人で打ち直す)

ハイ選^{イラ}ビヤ

(前打ちの前に投げだす。前打ち一その一つをとりあ

ようし よし よし

浜の砂は米だそうだ河原の砂は鐵だというぞ、船
便を仕立てて行きたいものだ

ようし よし よし ここが少しふくらんでいる
のでゆっくりと打ってみろ

あーあ すっかり造りあがってしまった

さあ選んでみる

げて)

前打ち一

オー 生^マリ鍛^カ冶^ジ又^ビ鉦^ラテ^イタ 肌^ハ又^ビール^ルッテ^ビ光^カ

リテ

アガー アガアガ

前打ち二

耳^ミカチリヤ 耳^ミカチリヤ

(一は自分の耳はつかまえずに二の耳をつかまえたので)

エー 耳^ミカチリテタ 吾^バ耳^ミカチナッテヤ ドウ

又^ミ耳^ミド カチル

前打ち一

汝^ワ耳^ミナ 沖^ウ繩^シ豚^イ又^ミ耳^ミ又^ヨーシ 大^ダイ^ラ大^ダイ^ラシ

テイ アイリヤ 吾^バ耳^ミナ 鼠^ウぬ^ネ耳^ミ又^ヨーシ チ

ヨンテイ アリリヤ 吾^バ耳^ミド カチラリナテヤ

汝^ワ耳^ミ カチラリルン

うーん できたての鉦というのはピカピカと光つ

て

あ 熱い熱い

耳をつかまえろ 耳をつかまえろ

えーい 自分の耳はつかまえずに他人の耳をつか

まえるか

お前の耳は沖繩豚の耳のようにダラリダラリとしているが、俺の耳は鼠の耳のようにちょこんとしている。自分の耳はつかまえられる。お前のがつかまれる

前打ち二

ヤリバドゥ 汝耳カチリッテ 言ジヤド吾耳カ
ツナッテ

輔いいじや

エーッ 生リ鍛冶又鉦テイタ 初テ黒々テイド
後ラ赤々ナルッテ 知ンチャヌ

前打ち二人とも

知ンチャナツタユー

輔いいじや

トウ 知ンリヤ

(鍛冶工を向いて)

ヒサレ イイジャ 此ヌツスコウナ 鍛冶ン生
ラシオーラリタスキンドウ 家イオーラバ 迎
イルンテイ 叔母姉妹神ナ御酒置キ 待チドゥ
オーリタスキンドウ 遠サンナ聴クラ 近サン
ナ見ユラテイ ジャンナジャンナシ 家イ供ス

そんなこといっても自分のをつかめ、他人のをつかむな

えーい お前たちはできたての鉦というのは、初めは黒々としていても後では赤くなるのがわからないのか。

知りませんでした。

これでわかったらう

さて叔父さん、鉦、鍬もこれだけできあがったので、家へ帰れば迎えようと、叔母姉妹神たちがお酒を用意して待っておられるだろうから、我等も意気揚々と家へお供します。

ナライイジャ

(全員、次の歌を唱う。鍛冶工は調子を合わせてホッ

ホッと囃子を入れる)

三、島^{シマ}又島^{シマ}カジ渡^{ワタ}サバエ 山城^{ヤシノ}又国^{クニ}カラ移^{ウツ}サバエ

島^{シマ}又御鍛冶工^{ウカザグ} ウタラミス

四、鉦^{シラ}ユハカイユ ウツカキテイ 島^{ヘル}又先^{サチサチ}々ヤル

カキテイ 田圃^{タフ}又タフタフ ウツカキテイ

五、粟^アユ作^{チク}ラバ 官^{クワン}又タミ 芋^{ハンチュ}稔^{ミギ}ラバ ドウユ

ヌタミ 願^{ニガ}イ稔^{ミギ}ラシ ウタラミス

鍛冶工

願^{ニガ}イ稔^{ミギ}ラシ バヤケーラヌ為^{タミ}シオウラヨウ ク

ネクネクネ

(鍛冶工は最後に幕に入る)

この狂言は約十五分ほどで荘重に、また軽快に進行する。この中で注目すべきはフケ備いいじゃが歌う歌詞で

一、大和又島カラ渡サバエ

島ごとに渡ってきたら。山城の国から移ってきたら。島の鍛冶工にお願いしよう。

鉦や鍬を作りあげ、島の先々まで耕して田圃の底から掘り起こし

粟を作るのはお上のため。芋が稔るのは我等のため。願いが叶うようお願いします。

願いが叶って我等みんなの為になるように



鍛冶工狂言

山城又国カラ移サバエ

八重山竹富ニ買イ込ミテイ

二、浜又真砂や米テンドウ

河原又砂子や鐵テンドウ

船タテ便タテ行キムナエ

という件りで、ことに二番の部分は船便を仕立て行ってみたいとなっている。これは鍛冶伝来について重要な問題を帯びている。歌詞どおりだと、直接大和と交流していたことになるが、造船、航海術などを考慮していたことになるが、定されるのだろうか。またこの狂言がいつ頃から種子取祭で演じられるようになったのか、その後どのような変遷をうけて今の形になったのか解明されるべき問題点である。

五、鍛冶遺跡について

沖縄で鉄を得たものは権力を握り、神と崇められたが、彼等はことごとく北方からの南下渡来人と関連の説話をもっている。これら渡来人については一、大和朝廷へ入貢帰化した掖久人の交易先端。

二、平家の落人。三、南北朝対立の敗走南軍。四、倭寇。などと区分されさまざまな説が交わされている。

八重山に鉄器が受容されたのは、八重山の原始古代史年表によると十二、三世紀頃とされている。それは平家の落人が南走してきた頃にあたる。とすると沖縄各地に残っている友盛嶽(あるいは友利御嶽)が必ずしも平家の直系とは考えなくても、大和国からの渡来人とみることができる。東恩納寛惇は『南島風土記』の中で、浦添の友盛嶽を察度王の故事とつなげて解釈している。また宮古島友利部落の峯間御嶽の由来記によると、大和の人間が漂着して大ツカサと婚し栄えたが、その祭神を「アマリファ^{カンカ}鍛治主^{ヌシ}」としている。そして近くの砂川部落に大和から伝わったとされる「トキ双紙」に「東り那利金」という神名がみえるが、竹富島仲筋御嶽の祝詞にも「成金^{ナリ}ほうる」と出てくるし、同じく久間原御嶽のイビ名にも「友利大あるじ」の名前がみえる。竹富のこの二つの御嶽の祖神は、沖縄本島から渡ってきたとされている。また稲村賢敷の説によれば、宮古島の友利、砂川辺りは倭寇の基地であったとのことである。このようにみてみると、「友盛」という名と倭寇とが重層をなして伝えられ



仲筋井戸と鍛冶屋の絵

ているといえよう。すなわち鉄およびその他の文化をもつた人たちが、南走であれ、交易、侵寇であれ、大和から沖繩本島、宮古、八重山と南下して支配権力とつながったり、神として崇められたりしていたことがわかる。

ところで竹富島に伝わる鍛冶遺跡としては、蔵元における鍛冶御嶽と仲筋御嶽の子御

嶽である白金御嶽、さらにンブフル丘下の村鍛冶屋があげられる。鍛冶御嶽は一五二四年（大永四年）西塘が八重山統治の蔵元を竹富島に創設した際、火の神とともに首里王府から奉請したものである。しかし一五四三年（天文十二年）諸々の理由で蔵元が石垣島に移転した時に鍛冶神も火の神とともに移転し、跡は顧られなかった。昭和七年に島内の農道改修が行われカイジ線も拡張されたが、遺跡の石積みも危く取りこわされて道路の敷石にされるところだった。そして昭和三十四年に蔵元跡が琉球政

府より史跡として指定されたのを機会に、鍛冶御嶽周辺も整備され由来の木札が立てられた。さらに五十四年には鍛冶御嶽のまつりが四百五十六年ぶりに復活したのである。現在は島内に鍛冶屋とてなく、農を生業とするものもない。わずかに自給の野菜づくりや、最近になって養蚕が復興してきているくらいである。それで神司らはこの一年間の道具の御礼と、鍛冶神にあやかるべく、石ヌ硬サ金ヌ硬サ體強サ身強サアラン給リと島民の健康を願っている。

白金御嶽は「成金ほうる」の神名を祝詞にもつ仲筋御嶽の子御嶽で、その場所は島で最も高いンブル丘の西南にあたる。稲村説によればまさに倭寇の居住地である。一九五六年八月、稲村氏と筆者はこの付近から次のような遺物を表面採集した。

一、青磁破片四十余个

内 底部破片十一個

縁部破片六個

二、南蛮焼の破片五十余个

内 底部破片三個

三、赤色土質の土器（パナリ焼）

無数に散乱

四、青色曲玉二個

だが鍛冶跡を立証する鉄滓に気がつかなかったのは返す返すも残念である。白金御嶽に伝わる話としては、仲筋御嶽の祝詞にある「なる金」は鍛冶師で、自分のお城を築くべく、ンブフル丘の南側に鍛冶を起こし道具を作りあげた築城の神であると伝えてある（前我名金多翁が仲盛マイツ神司からの話として、昭和五年頃筆者に伝授）。また仲筋部落の加治工家（家号はカゾヤー）は、毎年旧暦九月九日に一族が白金御嶽に参拝する。当主政智氏の祖父加治工山多は代々の村鍛冶として明治四十年頃まで仲筋村鍛冶をつとめていた。また家紋が火の神を示すところの三ツ石印であることからしても白金御嶽の伝説が裏づけられる。

現在は跡形もなくなってしまったが、ンブフル丘を北へ下ると仲筋井戸になるが、その途中に村鍛冶屋があった。蔵元が石垣島へ移転した後竹富島の村番所は波座間部落に設置されたが、鍛冶屋は豊富な水が得られ、しかも両部落の接する仲筋井戸周辺に設置された。明治末頃までは波座間鍛冶屋、仲筋鍛冶屋、と別個にあったが大正時代には統合された。昭和二十二、三年頃には人口も二千人を越え、全島くまなく畑と化したので鍛冶屋も繁盛したが、次第に人口流失による過疎化と、高齢化による農業切り捨てにより衰微して、技術革新を待たずして昭和四十年には絶えてしまった。その鍛冶屋の跡には昭和五十一年十月、石垣島からの海底送水が完成したのを機会に竣工記念碑が建ち、噴水をあげているのは皮肉なことである。

六、西塘について

竹富島出身の西塘は、一五〇〇年(明応九年)オヤケアカハチの乱に、王府の討伐軍として派遣された大里親方にその才能を見いだされ首里王府で法司官に仕えた。そして一五二四年(大永四年)武富大首里大屋子(八重山頭職を兼ねる)を拜命して帰郷するや、八重山統治の中心となる蔵元を竹富島に設置した。同時に火の神、鍛冶の神も請奉して、火の神は敷地内の子ナの方に、さらに道路を隔てて北側に鍛冶御嶽と鍛冶屋を設置した。当時の首里王府は尚真王が地方の按司を首里に永住させるなど中央集権を断行した後で、按司にはそれぞれ故郷への遙拝所を設けさせた。ご神体も聞得大君殿内と同じく、一、御すじの御前(祖先の霊)。二、御火鉢の御前(火の神)。三、金の美御すじの御前(金属の神)の三体であった。聞得大君以下神職の組織も整然としたもので、当時二百三十三名を数えた。斯る敬神崇祖時代に王府に仕えてきたので、王府の行政官としては当然しきたりどおり、火の神、鍛冶神をも請奉して祀ることになった。

ところで西塘が地方の小島の、しかも平民の出でありながらこのように重用されたのは、その卓抜した土木技術の故であった。球陽卷三、尚真王四十八年の記によると

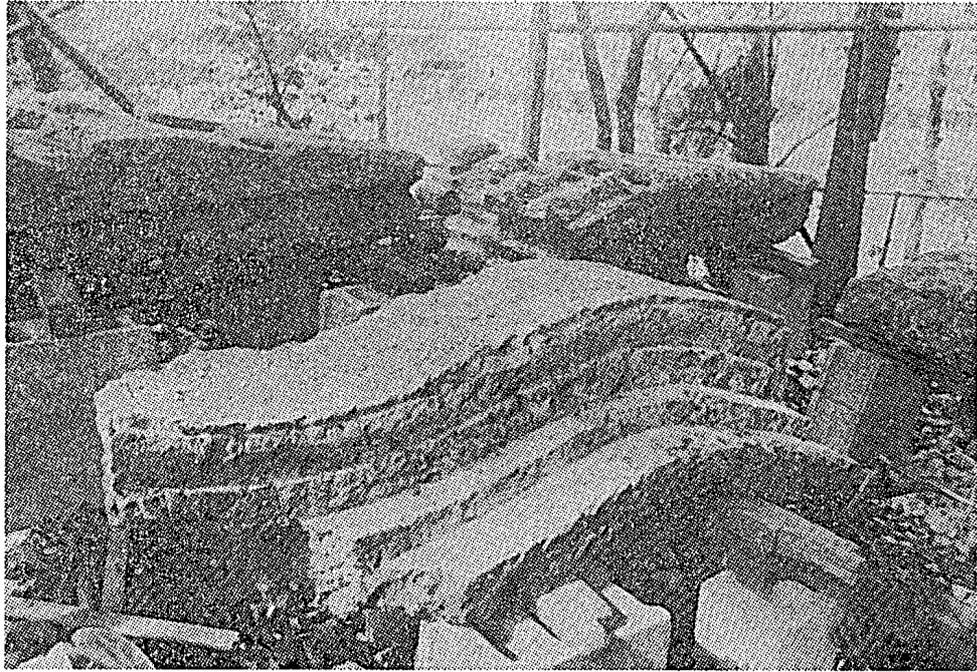
時值干園比屋武嶽築建石門 法司以他善巧精工 奏之於朝廷。即擢為建造主取。西塘即祈之日。吾能竣厥功 得歸故郷 必也供養此神 以致崇信。末閱教旬 石門告成。已歷二十五年 乞暇回家。

法司以為有功。亦奏之於王廷。深褒嘉之。即授武富大首里大屋子職——

とある。園比屋武嶽は王城の守り、守礼門近くにあり。国王の崇信はこのほか深かったという。この他にも西塘の主な仕事としては同年の梟が嶽の石門。久米島蔵元の石門。首里の上里家の墓などがその手になると伝えている。また当然に竹富島での最初の蔵元、また石垣島へ移転した蔵元もその手になると思われる。これらのうち現在見ることができるのは、久米島蔵元跡と上里家の墓のみである。園比屋武嶽は先の大戦によって破壊されたが、旧材は修復された同御嶽の裏に保管されている。

このように優秀な石工技術者としての西塘が、ことのほか鍛冶神に対して畏敬の念をもっていたとしてもけだし当然であろう。八重山統治の責任者となるや王府には鉄の供給を要請し、農具の作製配布、農業の改善指導を行い増産をはかった。また日時計を設置し、時報太鼓を設けて島民に時刻を知らせるなど、その施策は斬新かつ適切であった。

その後諸々の理由で蔵元が、同じ西塘によって石垣島に移されるや火の神も移されていった。その際鍛冶神のことが伝えられていないが火の神と一緒に移され、さらに各島々の村番所、村鍛冶屋に分身されたと思われる。また後年蔵元の火の神と鍛冶神は合祀されたのか、火の神司は鍛冶神の子女が継いでいる。石垣島に移転された蔵元の火の神はさらに昭和二十八年四月八日美崎御嶽の境内に移転されていた。移転式には、竹富の西塘が創始されたので竹富島の六山の神司、八重山大阿母、火の



園比屋武嶽の旧石材



西塘御嶽

神司、石垣の神司らが立合いのうえ莊巖に挙行された。

七、鍛冶についての伝承

鉄器をもたらしたのが平家の落人、敗走の南朝軍、倭寇、さらに琉球王府だったとしてそれらにまつわる伝承をみてみよう。

一、友利姓は平家の落人という友盛と同義だとする説があるが、竹富島にも平家の落人という伝承で友利の他に内盛、竹盛、生盛、本盛、仲盛、前盛、山盛、東盛、西盛、南風盛、請盛、大盛、粟盛、上盛、慶田盛、兼盛、新盛、三盛、玉盛、添盛、福盛、島盛、と二十二戸ある。さらに東、西、前などを冠した分家を加えると三十六もある。

二、島の北端、美佐志原に大和御主前ヤマトウシユマイの墓といわれる古い墓がある。平家の落人赤山王アカヤマオウの墓といわれ、彼は来島の際、一振りの剣と金製の碗、百合の花形の盃をもってきたといわれる。子孫の赤山家では春秋二回、大祭を催して祀っている。

三、村建ての神である六山の祖神は

(一)波座間村 根原金殿

(二)仲筋村 新志花重成殿

(三)小波本村 小波本節瓦殿

(四) 久間原村 久間原初金殿

(五) 花城村 花城他金殿

(六) 波利若村 波利若塩川殿

四、歴代の村鍛冶師の名前をみると最後の真栄里憲一は童名を加那といった。順次溯上ってみると、新盛久戸屋、根原宇座、与那城蒲多、赤山加津屋、加治工山多となっている。竹富島では大正の中期頃から名前が変革されはじめたが、それまでの名簿の中から鍛冶に關係のあると思われる名前を拾ってみると、加治屋、加真、金、兼、金真、加那、真知、真津、松、屋真、山多などがある。これらは鍛冶職の子孫でなくとも、鉄のように強く、それを鍛える鍛冶師と、それをもたらした大和人にあやかったものであろう。

五、鍛冶御嶽と白金御嶽は、干支の中で「ひのえ、ひのと、かのえ、かのと」の日は禁忌日となっている。これらの日は鍛冶神も忙しいので人を寄せつけなとされ、神事も行わない。

六、子どもが生れると産屋シラヤの地火炉ジロにイヌマキ、黒木などの固い木で火をたきつけ、芋掘り用の細長い鉾シラヤを四方八方から突きこむ儀式がある。産児と産婦の健康を祈り、鉄のように丈夫に育てほしいという意味で産屋シラヤの火祓ヒハラいと呼んでいる。

七、家を新築する時、柱立ての願いを行うがその時の供物は一、金釘十二本(ナンジャカナクギ、クガニカナクギ)、二、木炭二個、三、昆布二結、四、白蟹二つがい、五、玉子二個など八品を中柱の根元に

埋める。また落成式には一家の「カザイ」を歌って祝う。

一、竹富タキドウン又上ウイナカ

アーシターレー

ナカダテ マシジ
仲立又真頂ニ

アーシターレー

(中略)

十一、大和ヤマトカラ下クダタル

ヤシルカラ下クダタル

十二、黄金針クガニバイヤ引ヒキテシ

イチユピールヤ縮シミテシ

——以下略

八、旧歴十二月「きのとう」にはピルズマ願いの儀式を行う。六山の神司はニンニク一束を持って大司石川家に集り、同家に伝わる刀二本の前に供え諸作物の豊作を祈願する。石川家は波座間御嶽の神司で代々大司を務めているが、その刀は根原金殿が守り刀として大司に与えたものと伝えられている。

九、島の西海岸にはニールン石と呼ぶ靈石が立っている。旧歴八月八日には六山の神司と根ウスイ、小底場クレスクバの神司も加えて八名が公民館執行部、有志等と世迎チンカいの儀式を行う。ニライカナイの彼方から

五穀の種子や宝物（鉄器など）を満載した船が着き、小波本御嶽内の高所、小底場で八重山中に配布したという伝説がある。

十、石垣島には竹富見タキドクシといって、生れてまもない新生児を抱いて美崎浜から竹富島を拝ませる風習がある。竹富出身の偉人西塘にあやかるといふように、また鉄のように強く健康であるようにと蔵元鍛冶発祥の竹富島を見せて祈念するという。

十一、竹富島最後の鍛冶師だった真栄里家には、沖縄本島北部の山原鍛冶屋から分身したという鍛冶神の絵図が伝えられている。鞆神が火を起こし、三面六臂の鍛冶神が鉄を鍛えている図である。なお、同家の鞆は筆者が譲り受けて蒐集館に収蔵している。

十二、波座間鍛冶屋の赤山家とその後を継いだ根原家では、鞆まつりの夜中願ユナリニガいにも神司は出席しているが、仲筋鍛冶屋の加冶工家では神司は朝願いに参加したという。

十三、片目を上手につぶって見ることが出来る人は鍛冶屋にしたらよい、という話を聞いたことがある。

十四、石垣島での火の神司である上原カメは、家業は鍛冶屋だったが沖縄本島の小禄カニマン按司の子孫だといっていた。竹富島に来て祈願する時も沖縄本島方言で願っていた。

これらの伝承習俗の他に鍛冶が島民の日常生活に関わりあっていた例をみてみよう。一六六九年（寛文九年）時の摂政羽地朝秀は農村の疲弊を救済する手段の一つとして鍛冶職の制度も改められた。

即ち、百姓は鍬、鉦の研ぎ賃として米一升五合を負担していたが（半分は公庫に、半分は鍛冶工に）負担が重いというので免除され、無償で農具の手入れができるようになった。というが当島ではその伝承は聞かない。人頭税廃止後の鉦の料金の変動をみると次のようになっていた。

	大正初期	昭和十年代	昭和四十年
打替え	二銭	五銭	三百円
鋼入れ	十銭	二十銭	—
新調	五十銭	八十銭	—

また旧歴十一月七日の鞆まつりには、農具を使用している人全員から鍛冶御酒代としてまつりの費用を割当てていたが、大正末年頃には一人五銭ずつが徴収されていた。

八、おわりに

竹富島における伝承を基にした鍛冶についての小論をいちおうまとめるにあたり、やはり問題点が残ってしまったことに気づく。すなわち鉄器、鍛冶がどのように流入してきたか未だに不鮮明な点と、また鉄器は対明交易により本島を経由してもたらされたのも多かったはずなのに、口碑は殆んどが大和から下タル、ヤシルカラ下タルとなっていることなどである。

八重山における鉄の歴史を概観してみると十三世紀以降にはようやく鉄製農具の普及による生産力

発展、それにともなる現象として集落の集散移動がみられる。しかしながらこの時代の鉄器の存在は、貝石器時代を一変させるほどに多量に行き届いていた訳ではなく、鉄が不足すれば再び石器時代に逆行せざるを得ない状態であった。一三七二年、中山の察度王は初めて明に進貢し、以後三山が盛んに対明交易を行うに至り、八重山社会は鉄器への渴望を高め一三九〇年に宮古と共に中山へ入貢する。そして本島地方と先島地方の鉄器受容度による生産力の格差は拡大しながらも、八重山においても各島に群雄が割拠し、ついに一五〇〇年にオヤケアカハチの乱が起きるに至った。この頃までは八重山は神代史とされるほど最も遅れた社会であった。

一五二四年に琉球王府は竹富島出身の西塘を八重山頭職に任じ蔵元を設置するが、このとき鍛冶神をも分神している。琉球国由来記によると「尚寧王御代万曆中有石、木、鍛冶三奉行之主職」とあるがいつの時代から始まったかわからないとしている。

さらに一六〇九年の薩摩入り後は一六三七年にあの悪名高い人頭税が両先島に、ことに八重山に厳しく転嫁された。八重山の歴史を語る場合人頭税を抜きにすることはできないが、その徹底した収奪ぶりは年間素収入の五〇―七〇%が貢租とされていたというように、人民はまったく年貢上納のための農奴に等しいものだった。それも増産のためにはぜひとも農具、農法の改良が必要で、鍛冶職は王府の封建支配体制の中で重要な役割を担わされていた。

ともあれ封建体制が確立する以前は、人々の生活は苦しくとももっとおおらかだったことだろう。

石垣島大浜部落の崎原御嶽に伝わる鍛冶兄弟の伝承とか、鉄に関する説話をもつ竹富島六山の祭神、また未だに行われている世迎いの儀式などはひたすら外来文化の到来を願った人々の心の表われとみることが出来る。

貝石器の社会に鉄器が伝えられた頃の人々の驚きはどんなものであったろうか。その痕跡を示す願い口が伝えられているので、書き記して終りとします。

ヤンザトくくく

ヤンザトヌ仕立テオータル 大木 長木 元木や

○男入用ヌタミ ドウデインナ 給ラリ

ルンテイドウ願イ ウンヌクバ聞取給リ

此ヌ男生リヤ一人生リ 着物カンネーヌ 道具ン

ネーヌ 此ヌアザイヌ齒シ 木ユ切ラバ 高ドイ

シミンナー 根ドイシミテ ヤンザトヌ神ヌ前ヤ

側寄リ 脇寄リシ給リ

ウ尊

ヤンザトの神様(と三回呼びかける)

ヤンザトの神様が作られたこの木を○が入用で

すのでどうぞ切らせてくださるようお願い申しあげます。

げます。

この男は一人者で、着るものも道具もありませ

ん。このシャコ貝の齒で木を切るので、高倒れせ

ず根元から安全に倒れるようヤンザトの神様は側

へ寄ってください。

参考文献

註譯・球陽 池宮城秀栄



アザイ（シャコ貝）を鋸にみたてる

八重山文化第七号 阿佐伊孫良

八重山の社会と歴史(一) 崎山直

八重山文化論集二号 伊波寛・宮地檀子

八重山歴史 八重山歴史編集委員会

琉球諸島における倭寇史跡の研究 稲村賢敷

宮古島庶民史 稲村賢敷

鉄と琉球 城間武松

琉球国王の出自 折口信夫

校註・羽地仕置 東思納寛惇

琉球歴史物語 新屋敷幸繁

海南小記 柳田国男

鍛冶屋の母 谷川健一

八重山の明和・大津波・改訂版 牧野清